

コンタクト・ゾーンにおいて現れる痛みで結ばれる身体 ——女子プロレスラーとの練習の事例から

萩原 卓也

1 はじめに

「プロレスって本当に痛いんですか？」研究室の友人を女子プロレスの試合に連れていったとき、こう尋ねられた。この時すでに女子プロレスラー（以下、レスラー）たちが行う練習に参加していた筆者には、痛いということだけは文字どおり痛いほどわかっていた。しかし、それがどのくらい痛いのか、また、どのように痛いのかを説明することは非常に難しかった。

プロレスには痛みがつきものである。試合ではアクロバティックな大技が多用され、練習は体を壊してしまうほど過酷である。ベテラン・レスラーであるCは、このようなプロレスの特徴について「痛いのが商売です」と述べる。この言葉は、レスラーにとって痛みは重要な感覚であることを示すとともに、真に問われるべきは、プロレスが本当に痛いのかどうかではなく、そのような痛みはレスラーにとってどのように現れ経験されるのか、であることを物語っている。

ある人物の痛みや苦みの経験について、その程度や質を第三者が理解することは極めて難しい。レスラーの痛みの経験を理解するためには、研究者としてどのようなアプローチをとるべきであろうか。この問いは、何もプロレス研究のみに重要なのではなく、近年増えつつある、アスリートの痛みと怪我の経験を理解しようとする研究にも欠かすことができない。例えば、K.ヤングらは、男性アスリートへの聞き取り調査を実施し、彼らが痛みや怪我に耐えながら競技をすることを通して、自身の男らしさを構築していることを指摘した [Young et al. 1994]。また、合場敬子は、これらの先行研究を参照し、日本における女子プロレスラーの痛みや怪我の経験を、聞き取り調査により分析した [合場 2010]。そこで合場は、女子レスラーは先行研究で対象とされた男性アスリートと類似した痛みや怪我への対処方法をとるが、それらを自身の男らしさの構築とは結びつけていなかったと論じている [合場 2010:32]。しかし、いくらレスラーにインタビューを試みても、レスラーの痛みの経験そのものに迫ることは困難である。なぜなら、インタビューで明らかにできるのは痛みの経験に対する解釈、つまり頭の中の反省的な次元であり、痛みの経験そのもの、すなわち彼女たちの身体の感性的次元における痛みの経験に肉薄することはできない。彼女たちの痛みの経験に迫るためには、レスラーの身体に接近すること、

つまりレスラーの身体を形作っている練習の場面を取り上げることが不可欠である。

彼女たちの身体に接近する方法の1つに、実践的パフォーマンス研究¹⁾があげられるだろう。それは、調査者がみずからの身体を駆使し、被調査者の身体的パフォーマンスを学び実践していく中で、彼／彼女たちの感性・感覚的な経験から形作られる被調査者の世界を理解しようとする試みである。そこでは、調査者と被調査者との相互関係が重要になる。

本稿の目的は、レスラーにとって痛みはどのように現れ経験されるのかを明らかにすることである。そこで、彼女たちの身体的な経験に迫るために、実践的パフォーマンス研究を参考にする。そして、実践的パフォーマンス研究において強調されてこなかった調査者と被調査者とのあいだをより明確に描き出すために、コンタクト・ゾーンという視点を実践的パフォーマンス研究に投げかける。そこから、筆者とレスラーとの相互行為のコンタクト・ゾーンにおいて生起する痛みについて考えていく。

まず次章において、メアリー・L・プラットの提唱したコンタクト・ゾーンという概念を簡単に説明する。そして、実践的パフォーマンス研究を具体例とともに概観したあと、実践的パフォーマンス研究に、コンタクト・ゾーンという視点を投げかける意義を述べる。つづいて、女子プロレスの簡単な歴史、筆者が調査を行った女子プロレス団体（以下、団体A）の概要とその調査方法、そして調査の大半をなした練習の概略を述べる。次に、筆者自身も練習に参加することで経験した痛みの具体的な事例を、筆者とレスラーとの相互関係に着目しながら取り上げていく。最後に、以上をコンタクト・ゾーンという視点で描き出すことを通して、レスラーにとっての痛みの経験とは何かを考察する。さらに、コンタクト・ゾーンという視点自体にも考察を加えたい。

2 コンタクト・ゾーンとは

まずはじめに、コンタクト・ゾーンという概念を、コンタクト・ゾーンを理解するうえで重要な2点とともに簡潔に説明する。プラットによれば、「コンタクト・ゾーンという社会空間は、まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所である。それは、植民地主義や奴隷制度など（中略）しばしば支配と従属という極端な非対称的關係において生じる」[Pratt 1992:4]（日本語訳は田中[2007:31]を参照）。ここから、田中雅一は、研究者が調査を行うフィールド自体も、調査者と被調査者とのコンタクト・ゾーンとして捉えることができると主張している[田中 2007:32, 39]。本稿もこの考え方に沿って、筆者の身体とレスラーのそれとのコンタクト、すなわち互いの身体同士の「衝突」をコンタクト・ゾーンとして捉える。

コンタクト・ゾーンが重要である理由の1点目は、そこではしばしば非対称の關係が問題になることである[Pratt 1992:7]。ゆえに、コンタクト・ゾーンという視点をを用いることで、本稿が問題にする調査者—被調査者間の關係の変化を明細に描き出すことが可能になる。

2点目は、「『コンタクト』という視点は、いかにして主体が相互の關係において、かつ相互の關係によって構築されるのかということを強調する」ことである[Pratt 1992:7]。

したがって、コンタクト・ゾーンという視点を用いることで、いかに筆者とレスラーのそれぞれが調査者―被調査者の関係において、またはその関係によって相互に構築されるのかを捉えることができる。

では次に、実践的パフォーマンス研究とは何かを具体例とともにみていく。そして、実践的パフォーマンス研究に不足している部分を補強するために、コンタクト・ゾーンという視点を投げかける意義を考えていく。

3 実践的パフォーマンス研究とは

3-1 実践的パフォーマンス研究

実践的パフォーマンス研究では、調査者が自身の身体を駆使しながら被調査者のパフォーマンスを実際に習得し、被調査者とともに実践していく。被調査者との相互行為の中で生起する調査者自身の身体感覚にも注意することで、パフォーマンスが学習されていく、また身体化されていく現象を捉えようとしてきた。そして、そのような経験が生み出す彼／彼女たちの世界を明らかにしようと試みてきた。

そもそもこのアプローチは、J. レイヴと E. ウェンガーによって提起された実践共同体論が目を向けてこなかった部分を補うために試みられてきたといってもよい。実践共同体論は学習を、周縁に位置する新参加者が実践への参与を通して、熟練者で構成される中心地に一体化していく過程と捉えようとした [レイヴ&ウェンガー 1993]。これに対する批判点として、教える側から学ぶ側への一方向的な影響力の存在を仮定していることや、両者間の関係を静態的に捉えていることなどが指摘された [福島 1993]。また、実践共同体論では、共同体の内実を記述する際、みずからの行動に対する参加者の反省や解釈に主に着目している。これに対して、実践的パフォーマンス研究の基本的な姿勢は、「いわばメルロ＝ポンティ的な『身体＝主体』のような感性的次元における、ハビトゥスの生成と実践の産出を記述しようとしている」ことである [森山 2009:72]。また、実践的パフォーマンス研究においては、「身体知を外側から記述するのではなく、身体知のほうから社会を記述している」[森山 2009:74]。そこでは、被調査者たちにとっても言語化することが難しい、身体の感性・感覚的な領域をいかに捉えるかが課題となる。

では実際に、実践的パフォーマンス研究はどのような研究に代表されるのだろうか。森山達矢は、みずからが合気道の技と感覚を学ぶことで、合気道における技の感覚の伝達実践を明らかにしようと試みた [森山 2008]。森山は、感覚を学ぶ側と教える側の相互行為に着目した。森山は、稽古において先輩から自身の身体感覚に注意を向けるよう促され、さらに稽古の中で互いの身体感覚を指摘しあうことで、より感覚が鍛えられていったという [森山 2008:96-97]。また、このことによって、自分だけでなく相手の心身の状態も把握するように鍛えられ、以上のような稽古者同士の相互行為の中で、技の「感覚」を学んでいくのだという [森山 2008:96]。森山は、合気道を実践する者のこのような身体感覚を、自身が学ぶ側から教える側に移行していく中で理解していったという [森山 2008:94]。

実践的パフォーマンス研究の代表例をあげたが、森山は調査者と被調査者との相互行為から、被調査者の感性的次元における経験が生み出す被調査者の世界を理解しようとしている。では、先行研究の何が問題なのか。確かに先行研究では、行為者それぞれが相手との相互行為における経験から、パフォーマンスを習得していく過程、また自己を構築していく様子が捉えられている。しかし、相互行為それ自体は、行為者それぞれにとってどのように現れ経験されているのだろうか。行為者のあいだでは何が起きているのだろうか。この問いに実践的パフォーマンス研究はあまり着眼してこなかったと思われる。

3-2 実践的パフォーマンス研究とコンタクト・ゾーン

筆者は先に、コンタクト・ゾーンを理解するうえで重要な2点を指摘した。ここで、実践的パフォーマンス研究が力点をおいてこなかった行為者のあいだを克明に描き出すことができる可能性について、その2点から考えてみる。

実践的パフォーマンス研究が乗り越えようとした実践共同体論では、新参者が熟練者の形成する中心地に近づいていく過程、つまり新参者が熟練者に一体化していく過程の分析を試みている。これをやや強引にコンタクト・ゾーンという概念に引き寄せてみる。それは新参者の形成するゾーンが、熟練者の形成するゾーンと接触する領域を実践に参加していく中で拡大し、やがて熟練者のゾーンと一体化していく一方向的な過程であると言い換えることができるだろう。

これとは異なり、実践的パフォーマンス研究は、習熟度の異なる2人の相互のコンタクトにおいて、異なる両者の交叉や衝突、交渉といったような相互行為の中で生成するもの、獲得されるものから被調査者の世界に迫ろうと試みている。それは、コンタクト・ゾーンの第1の特徴である、調査者と被調査者の非対称的な関係を描き出すことと視点を共有する。そして第2に、調査者と被調査者との相互関係の中で被調査者の世界に迫ろうと試みてきた実践的パフォーマンス研究は、相互における、また相互によつての自己の構築の過程を捉えうるコンタクト・ゾーンと特徴を共有している。

したがって、コンタクト・ゾーンという視点をを用いることで、実践的パフォーマンス研究が問題にしてきた調査者と被調査者との相互関係をより明瞭な形で描き出すことができる。また、調査者自身が獲得していくパフォーマンスやその変化が、調査者と被調査者との相互行為の中でいかに達成され、影響しあっているのかをより明細に捉えることができる。と同時に、コンタクト・ゾーンという視点が何よりも強調する重要なポイントは、その名前の通り、行為者それぞれのあいだにおいて生じている現象である。コンタクト・ゾーンという視点は、実践的パフォーマンス研究が着眼してこなかった、相互行為それ自体において何が生成しているのかを浮き彫りにする可能性を持っている。

本稿の目的は、筆者とレスラーとの相互行為の中で生起する痛みについて考察することを通して、レスラーにとって痛みはどのように現れ経験されるのかを明らかにすることである。以下では、実践的パフォーマンス研究が着眼してきた相互関係に、その関係のあいだを際立たせるコンタクト・ゾーンという視点をあてがい、レスラーの痛みの経験に肉薄していきたい。

4 女子プロレスの歴史，団体 A の概要と調査方法，練習内容

具体的な事例の検討に入っていく前に，女子プロレスの歴史，団体 A の概要と調査方法，さらに団体 A が行う練習内容について簡単にみていくことが必要だろう。

4-1 女子プロレスの歴史

女子プロレスは隆盛期と低迷期を繰り返してきたが，ピーク時の1970年代と1980年代後半には，多い時で観客12,500人を集客するほどの人気を博していた〔亀井 2000:79〕。筆者が実施した，当時を知るレスラーへのインタビューからも，「昔は給料袋が立った」「会場での売り上げをダンボールに足で詰め込んで巡業していた」という全盛期の様子が伺えた。さらに，昔は団体ごとに地方を転々と移動する巡業生活が主であったため，試合数も多く，試合自体が練習の役割も担っていたという。ちなみに，全盛期の試合数は，年間250試合であった〔亀井 2000:68〕。また，この頃の女子プロレス会場に足を運ぶ観客は，ほとんどが女子中高生であり，彼女たちにとってのアイドルが，女子プロレスラーたちであった〔亀井 2000:74-98〕²⁾。1990年代に入ると，団体間で対抗戦を開催することにより，また男子プロレス興行内にて女子プロレスの試合を行うことで，女子プロレスに男性客を取り込んでいくことに成功する〔亀井 2000:18, 140〕。しかしその後，2000年前後から女子プロレスの低迷がみえはじめ，興行の規模は縮小し，団体も解散と再編を繰り返し，小規模な団体が乱立するようになっていく。

2010年4月現在では，100人前後から350人程度の集客を見込む定期的な興行を月に2回から3回行う団体が多い。それに加え，「ビッグマッチ」といわれる500人から1,000人前後の集客を見込んだ大規模な興行を年に2回から3回開催するという形態をとる。2010年4月の時点で活動しているレスラーは全国で88人ほど確認でき，そのうち63人が女子プロレスの団体に所属している。その他のレスラーは，団体の解散や再編にともない，男子プロレスの団体に所属する人もいれば，団体から独立してフリーランス（以下，フリー）として活躍する人もいる。

現在では，どの団体も地方巡業をほとんど行わず，団体が拠点を置く場所での興行が主となっている。各団体が抱えるレスラーの数も少ないので，1回の興行には興行主催団体とは異なる団体に所属するレスラーやフリーのレスラーが参加する。³⁾したがって，レスラーは，団体内で常に練習しているレスラー以外と対戦する必要がある。

4-2 団体 A の概要と調査方法

団体 A もまた，女子プロレス界の現況において例外ではない。団体 A は，2010年4月の時点で5人の活動レスラーを抱える。⁴⁾東京に事務所を構え，都心を中心に活動する。団体 A は月に2回ほど東京で興行を催し，不定期で地方興行を行っている。

筆者は，2009年11月から2010年10月にかけての1年間を通して，団体 A に密着しながらフィールドワークを行ってきた。内容は，団体の練習への参加，試合会場における準

備・後片付けの手伝い、試合の観察、ファンイベントへの参加、そして、スタッフ、ファン、レスラーへのインタビューである。本稿では、練習において筆者自身がレスラーと練習する中で経験した痛みを中心的な事例として取り上げる。

4-3 練習

レスラーにとっての痛みの経験を理解するために筆者が注目したのは、レスラーがレスラーであるための身体を形作る練習である。プロレスは、試合において対戦相手の技を受けることを前提とする特殊性を持つ。ゆえに、相手の技をどのように受け、そしていかに相手の長所を引き立たせるのか、という受け手の在り方が重要になる。レスラーによれば、対戦相手とともに試合を創り上げていくこの行為は、レスラー間の信頼関係によって成り立っているという。

団体 A は、火曜日と水曜日の週に 2 回、3 時間半から 4 時間にわたる練習を行う。団体 A は道場を所有していないため、リングが常設された場所を借りての練習となる。この練習のコーチは、フリーのレスラーとして活躍するベテラン C が担う。団体 A に所属しないフリーのレスラーも、この団体の練習に参加することは可能である。したがって、定期的に参加しているフリーのレスラーもいれば、不定期で参加する者もいる⁵⁾。練習時の人数は少ない時で 4 人前後、多い時で 10 人ほどになる。レスラーは、リングを使える週 2 日の集合練習以外は、各自でジムに通ったり、外に走りに出たりして、試合の翌日以外はほぼ毎日練習に励むという。

次に、練習の流れについて記す。まず正午に集合し、リングのロープを張り直したり、窓を開けたり、練習できる環境を整える。そして、準備体操、ランニング、縄跳びなどを経て、多種多様な筋力トレーニング（以下、レスラーにならい基礎体と記す）に移る。この時点で、練習の約半分である、1 時間半強が経過している。ゆえに、前半は基礎体が練習の大半を占める。その後、15 分間ほどの休憩をはさみ、リングの上で前転・後転などを含むマット運動や受け身の練習に移る。つづいて、ロープワークの練習を行う。ここまでは、毎回の練習においてレスラーに課される、レスラーにとっての基礎的な練習である。その後、関節技の練習や実践的なスパーリングの練習に移る。

筆者は、主に基礎体、マット運動、受け身、ロープワークなど、練習の前半に行われるメニューに参加した。練習の後半に行われるスパーリングなどの実践的な技の練習をするに至るまで、現段階の調査において筆者は辿りつくことができなかった。ゆえに、練習の後半部では、レスラーとは別メニューでさらなる基礎体や、受け身の反復練習が筆者には課せられた。練習には、異常なまでの苦しさや、痛みがともなう。幼少期から現在に至るまで多様なスポーツを体験し、体力には自信のある筆者でも、時に嘔吐してしまうほど過酷な練習であった。

5 痛みの経験に対する解釈の変化

ではここから、練習における具体的な事例を取り上げつつ、筆者とレスラーとの相互行

為の中で生起する痛みについて考えていきたい。筆者がレスラーの痛みの経験を理解しようと奮闘する中で失敗した事例も含め、以下に事例を大きく3つのセクションに分け整理していく。まず、レスラーとの関係性の変容によって、筆者の痛みに対する解釈もそれにとともに変化していく事例をあげる。次に、ともに苦しい練習を行う経験を通して、筆者とレスラーが身体的な共同感覚を養っていく事例をみていく。最後に、痛みを受ける・与える経験から、筆者とレスラーとのあいだに身体的な関係性が立ち上がってくる事例を取り上げたい。

5-1 レスラーの痛みの経験に近づく筆者

まず、練習の反復によってできた傷から生じる痛みを通して、団体Aに対する帰属意識が筆者自身の中で育まれる経験をみていく。練習に参加させてもらっていた筆者は調査当初、レスラーの痛みの経験を理解しようと試みるにあたって、レスラーが感じる痛みと同じような痛みを獲得しようと志向していた。

前述したように、プロレスには痛みがつきものである。激しい練習を反復して行うことにより、プロレスの練習をする以前の生活では使わなかった身体の部位に、傷やアザなどができる。コーチであるCはそれらの中でも、前受け身の反復練習によって擦り剥ける肘と、ロープワークによってできる背中のアザを特に強調していた。筆者も、前受け身（手首から肘にかけての前腕と太ももの表側をリングマットの上に打ちつけることで体を守る）を繰り返すことで、肘を擦り剥いた。結果として肘には、虫さされのような腫れた傷ができた。

また、リングロープのカヴァーの中には、とても太いワイヤーが通っている。そのため、ロープに投げ出された時に、何もしないままロープに突っ込んだのでは、非常に大きなダメージを負うことになる。そのダメージを最小限に抑えるために、ロープワークなるものを行う。ロープワークでは、背中を思い切りロープへと投げ出し、そのロープがたわむ反動を背中で受け止め、その反動を利用してロープから離れることで衝撃を緩和する。ロープから跳ね返るのは、自分の体への防御なのである。ロープワークでは、短距離走の勢いとともに、南北または東西のロープへとリング上を何往復もする。そのため、何度もロープに背中を投げ出し、背中でロープを受け止めるので、背中へのダメージは相当なものになる。筆者も、ロープワークの練習の際、背中からロープに飛び込むのを躊躇するほど背中が痛くなっていた。そして背中には、ロープに沿ってできたアザがうっすらと残った。これらの傷は、デビューを果たしたレスラーたち全員に刻まれている。筆者のインタビューによると多くのレスラーは、このように身体に刻まれていく傷やアザを勲章とし、辛い練習や試合に耐えた経験を自信につなげていた。

筆者にとって、これらの傷やアザはどのような意味をもったのだろうか。プロレスによってできた傷やアザは、何も意識していない時に、いきなり筆者を襲ってくるのであった。練習に参加した夜、寝る前にシャワーを浴びると、急に肘と背中がヒリヒリとしみる時があった。その瞬間、プロレスのことが、ふと頭の中に想起されるのである。傷やアザが痛くてしみるという感覚は、それほど衝撃的なものであった。しかし、その痛みにもかかわ

らず、「これが、コーチ C が言っていた傷なのか」と、レスラーに刻まれていく傷が筆者自身にも刻まれつつあるのだという事実に、言葉では表せない喜びを感じた。シャワーでしみるという痛みは、もはや痛みではなく、団体 A への帰属意識を示す気持ちのよい「痛み」であった。この出来事は、ただでさえ調査が困難であるプロレス団体の深層部に入り込んでいきたい、と志向する筆者にとって、嬉しい出来事として捉えられた。このように、傷から生じる痛みという身体感覚によって、レスラーがプロレス団体に対する帰属意識を育んでいく様子を実感することができた。

5-2 筆者とレスラーとの関係性の悪化

つづいて、筆者とレスラーとの関係が悪化した時期をみてみる。ここで注目したいのは、調査者と被調査者との関係性の変容によって引き起こされた、痛みに対する解釈の変化である。

初めて練習に参加してから長い月日が流れ、「この人（筆者）はいったいつまでここにいるのだろう」という空気がレスラーのあいだに流れ始めた。デビューを目指すのであればこれ以上練習に参加してほしくない、という意図をレスラーからほのめかされることもあった。また、プロレス業界側の人間でない筆者は、重要な興行前にレスラーが集中して練習を行う際などに、「席を外してもらえないか」「練習を休んでももらえないか」とレスラーから告げられることもあった。これらは当然のことであり、レスラー側に悪気など微塵もない。しかし、何か締め出されたようなこの感覚は、結果として、筆者の気持ちを暗くさせていった。改めて外部者と内部者の境界線を引かれたのである。

そして、そのようなネガティブな感覚は、筆者の身体感覚までも暗くさせていった。傷やアザは、団体 A に入り込んだ証、または帰属意識として筆者には捉えられていた。しかし今度は、それらの痛みが筆者を落ち込ませる原因になっていった。再びシャワーを浴びるたびに肘の傷や背中のアザから生じる痛みは、嫌でもプロレスのこと、筆者とレスラーとのあいだの越えられない境界線を思い起こさせた。これらの痛みは体にこびりつ⁶⁾いており、取り払うことはできなかった。

このような中、レスラー Y より、「体調の良し悪し、怪我かどうか、痛いかどうかなんて気の持ちようです」という話を聞いた。ここから筆者は、レスラーにとっての痛みの経験は周囲との相互関係において可変的である、それはつまり、周囲のレスラーやファンとの関わり方によって、レスラーの痛みの経験は変化するのである、と気づかされた。レスラーとの関係性の変容により、痛みの経験に対する解釈の変化を自身で体験していた筆者にとって、このレスラーの言葉は説得力をもって感じられた。しかし、これで本当にレスラーの痛みの経験に迫ることができたのだろうか。

以上の事例において、確かに筆者はレスラーとの非対称的な相互関係において、レスラーにとっての痛みの経験を知ることができた。しかし、ここで取り上げられている経験とは、ある経験を積んだ後にその経験をいかに意味づけするのかという解釈や反省によってもたらされているものである。つまり、以上の事例は意識的、言語的な経験であって、身体の感性的次元における経験とは齟齬が生じている。したがって、これでは痛みの経験

によって生成される彼女たちの世界には接近できていない。そもそもの傷やアザができる練習の現場において生起する痛みそのものへ迫る必要がある。

次に、以上の反省を踏まえたうえで、ともに苦しむ経験と、痛みを受ける・与える経験という2つの事例を筆者とレスラーとの相互行為からみていく。以下では、特に痛みという感覚がレスラー同士のあいだで経験される位相に着目する。

6 ともに苦しむ経験

ここでは、腕立て伏せとスクワットの練習において、筆者とレスラーがともに苦しむ経験を通して、互いに「ともにある」という共同感覚を養っていく事例を取り上げる。前述したように、レスラーの練習のほとんどは、基礎的な体力を鍛える練習である。そのような中レスラーは、たとえ1人で行うことができる基礎体であっても、2人1組のペア、もしくは全員で円を形成して行う。ここで取り上げる腕立て伏せとスクワットの事例も同様である。

6-1 腕立て伏せ

まず、レスラーと一緒にいった腕立て伏せから、筆者とレスラーの身体感覚がシンクロしていく現象をみる。これは、猛暑日を記録した8月終わりの練習での出来事である。練習場には冷房設備はなく、上窓やシャッターを全開にして練習を行う。しかし、その異常なまでの暑さは、多くのレスラーの汗が染み込まれた年季の入ったリングマットの放つ、むせるほどの悪臭を助長していた。レスラーたちもこの臭いには、あからさまに嫌な顔を見せ、「くさい」と文句を言っていたものである。この日、基礎体の一部として、さまざまな種類の腕立て伏せ⁷⁾を計200回も全員で輪になって行った。回数をかさねるにつれ、参加している筆者の腕も、筆者の横にいるレスラーの腕も震え、今にもマットに崩れ落ちそうであったが、そこをみんなで耐えた。歯を食いしばり苦しみに耐える声が漏れ聞こえてくるが、それぞれが息を止めて踏ん張った。誰1人として、涼しそうな顔をしている者はいなかった。そして、どうにか200回を終了した直後、全員があわせたようにマットに崩れ落ちた。その後の静寂と、荒い息づかい、そして、崩れ落ちたマットから放たれる汗の臭いをその場にいる全員が共有していた。みんなが嫌な顔でくさいと言っていたそのマットの臭いさえも、なぜか心地のよいものであった。

6-2 スクワット

次に、全員でリング上に円を形成して行うスクワットの事例から、それぞれの身体がその円の大きさまで拡張する感覚の経験を考えてみたい。スクワットをする際、以下のように全員で数を数える。1人が10回ずつ数えると、その隣の人が次の10回を数えるというように交代していく。そのとき、数える人が「イチ！」と声を出すと「ハイ！」と全員で応答する。それが「イチ！ ハイ！ ニ！ ハイ！ サン！ ハイ！」というように続いていき、通常120回前後スクワットを行う。筆者が実際に参加して気がついたことは、約半

分である50回を過ぎたあたりから、全員が発する声のリズムと、表情や汗などを含めた身体に現れてくる苦しさ、その場でスクワットをしている全員をシンクロさせていくことである。各々の身体が、全員で形成するその円の大きさまで拡張されたような感覚である。

以上、2つの事例からわかることは、うめき声、辛い表情、マットの臭い、音やリズムといった知覚を介して、それぞれの身体が共振していることである。むしろ、ともに苦しく練習を続けることが、レスラー同士を結んだ共同的な身体をその空間に立ち上がらせている、と言い換えることができるかもしれない。ここに、苦しみが触媒となって、レスラー同士のあいだに「ともにある」という共同感覚が生成されている様子がみてとれる。ここで重要なのは、苦しみの質や程度ではなく、苦しみそのものによって、レスラーの身体が互いに関係づけられていることである。

7 痛みを受ける・与える身体

次に、痛みを受け、そして与えることで、レスラー同士のあいだに信頼関係が構築されていく過程を、腹部に飛び乗る腹筋のトレーニングから考えていく。先に述べたように、多くの基礎体はペアで行われる。腹筋を鍛える基礎体の種類の中に、仰向けに寝転んだペアの片方の腹部に、もう片方が両足を揃えて「ピョン」と飛び乗り、そして降りるという動作を繰り返すことで腹筋を鍛えるトレーニングがある。筆者もある日、このいかにも漫画の1コマに出てきそうなトレーニングに挑戦することになった。

筆者の周りのレスラーは相手に乗られるたびに「ウッ」と苦しそうな声をあげていたが、「あの細いレスラーもできているし私もできるだろう」と、筆者はこのメニューを少し甘くみていた。しかし、実際にレスラーが私の腹部に飛び乗ると、内臓が押しつぶされてしまいそうな重い衝撃が走った。通常では、乗る・降りるを10回繰り返して1セット、そしてそれを2セット行う。しかし、筆者はこの初めてのチャレンジにおいて、1回飛び乗っただけでギブアップしてしまった。周りのレスラーたちはそんな筆者を見て笑っていたが、筆者には耐えがたい未知の痛みであった。その次の練習の機会に、同様のトレーニングを行った際、筆者は飛び乗られることに5回耐えることができた。そして、腹部に飛び乗られる前と後では、筆者がまさにレスラーに飛び乗る時の感覚が、レスラーに乗る前のそれとはまったく異なるものであった。

この一連の経験において、重要なことが2つある。1つ目は、1回目よりも2回目の練習において飛び乗られたほうが衝撃の度合いを予測できたためか、5回耐えることができたこと。2つ目は、筆者が今度レスラーに飛び乗ろうとするまさにその時に、相手に生じるであろう痛みが、ふいに自分の中に現れたことである。それは、自分が相手に痛みを与えていると同時に与えられているような、自分の身体と相手の身体とを区別することが難しい感覚であった。言い換えるならば、痛みの現れとともに身体がその場に立ち現れ、その身体とは自分の身体なのか、それとも相手の身体なのかを区別することが困難である感覚ということもできる。もし筆者が腹部に乗ってもらった経験などないままレスラーの腹部に飛び乗るということだったならば、筆者が乗ることによってそのレスラーが感じる痛

みなど、筆者はただ漠然としか想像できなかったであろう。

このトレーニングでは、相手に生じるであろう痛みを「知る」ことが表面的には重要に思える。しかし、その相手の痛みとは、レスラーそれぞれが異なる体格や技の特徴を持つため、ある特定のレスラーとの相互関係の中でしか規定されえない。レスラーは、いつもお馴染みのレスラーとペアを組むわけではなく、異なる体格を持つ相手とペアを組むこともある。レスラーは誰に腹部に乘られるか、誰の腹部に乘るかを変化させていくことによって、さらに腹部だけでなく身体のさまざまな部位に対して痛みを受けて・与えていくことによって、多種多様な痛みを身体で学んでいく。レスラーはこのようにして、痛みを受ける・与えるべき「適切な」場所とそのやり方を身体で了解していく。ここでいう「適切」とは、相手に怪我をさせないと同時に、相手に対して躊躇せずに力いっぱいの攻撃ができるという意味である。重要なのは、痛みを意識的に「知る」ことよりも、痛み自体が媒体となってレスラー同士のあいだに関係を生じさせる、そのことである。

以上、ともに苦しむ経験と、痛みを受ける・与えるという他者との相互行為の中で、痛みによってレスラー同士のあいだに身体的な関係性が立ち現れる現象をみてきた。しかし、この身体的な関係性とはいったい何なのか。これこそがまさしく、先に述べた、試合をともに創り上げるうえで欠かすことのできないレスラー同士の信頼関係であろう。つまり、苦しみの中で「ともにある」という共同感覚、また痛みを受ける・与えることの反復によって培われる相手への「適切な」働きかけの仕方が、信頼関係を支える身体性となっている。

8 考察と結論

考察に入っていく前に、本稿の目的をおさらいしておく。それは、レスラーにとって痛みはどのように現れ経験されているのかを明らかにすることであった。そのために、実践的パフォーマンス研究における調査者と被調査者とのあいだを、コンタクト・ゾーンという視点で描き出す方法を試みた。

本稿では、大きく3つに分けた練習の事例から、筆者とレスラーとの相互行為の中における痛みの経験についてみてきた。それでは、それぞれの事例をコンタクト・ゾーンという視点から描き出し、筆者とレスラーとの相互行為のコンタクト・ゾーンにおいて生じる痛みの経験について考えていく。

まず、筆者はレスラーとの非対称的な関係の変容において、傷やアザから生じる痛みの解釈に変化が生じた事例をあげた。ここから筆者は、レスラーにとっての痛みの経験は、周囲との相互関係によって可変的であるという結論を導き出した。これをコンタクト・ゾーンという視点に引き寄せて考えてみると、筆者とレスラーとの非対称的なコンタクト・ゾーンにおいて、それぞれがどのように相手に影響を与えているのかを描き出すことができたといえよう。しかし、これは痛みの経験に対する後づけの解釈や反省を問題にしているという点で、レスラーの痛みの感性的次元に迫るという実践的パフォーマンス研究の目的とは齟齬が生じていた。つまり、そもそもの傷やアザができる練習における、筆者

とレスラーとのコンタクト・ゾーンそれ自体において何が起きているのかを掴むことはできていなかった。

つづいて、腕立て伏せとスクワットの事例を取り上げた。そこでは、うめき声、辛い表情、マットの臭い、音やリズムなどの知覚を通して身体が共振し、ともに苦しむ経験そのものが、レスラー同士のあいだに身体的な共同感覚を生成していることを指摘した。これをコンタクト・ゾーンという視点から捉え直してみると、ともに苦しむという行為によってリング上に筆者とレスラーとのコンタクト・ゾーンが立ち現れる、ということができる。そして、そのコンタクト・ゾーンにおいて立ち上がってくる身体とは、筆者とレスラーとが互いに結びつけられた、共同的な身体であった。

次に、腹部に飛び乗られた事例を通して、痛みを受ける・与えるという相互的な行為から、身体的な関係性が構築されていく現象をみてきた。それは、自分が受けた痛みを同じように相手に与えるまさにその時に、相手に生じるであろう痛みが不意に自分の中に生じることで、相手に対しての「適切な」働きかけの仕方を学んでいく経験であった。これをコンタクト・ゾーンという視点から描き直してみると、痛みを受ける・与えるという、筆者とレスラーとのまさに衝突により生まれたコンタクト・ゾーンにおいて、筆者の身体とレスラーのそれとが結びつけられた関係が立ち現れてくる、ということができるだろう。

以上のように、レスラーにとっては、相互行為の中で生起する苦しみや痛みの程度や質を頭の中で意識的に理解することが必ずしも重要なのではない。むしろ、相互行為の中で生まれてくる苦しみや痛みが、コンタクト・ゾーンという空間において、筆者の身体とレスラーのそれとを結びつけられた関係として生じさせていること、そのことが重要なのである。それは苦しんでいる中、痛みを受けている中で、自然と否応なしに現れてくるような関係性である。このように、コンタクト・ゾーンという視点を投げかけることで、相互の行為において、かつ相互の行為によって、いかにレスラー同士の関係が構築されているのかを明らかにすることができた。筆者はまさにコンタクト・ゾーンにおいて現れる苦しみや痛みを介して、「レスラーにとって痛みはどのように現れ経験されるのか」に触れることができたといえるだろう。

そして、そのようにして生成された共同感覚や、相手に対しての「適切な」働きかけの仕方が、試合をともに創り上げるために必須であるレスラー同士の信頼関係を培っているのであった。したがって、レスラーにとって痛みとは、ある意味で相手と同調するため、試合の成立を可能にするために他者とコミュニケーションするための手段である。そこで現れるコンタクト・ゾーンとは、常にレスラー同士のあいだに存在するのではなく、相互行為のたびにリング上に現れては消えるものである。ゆえに、彼女たちにとって痛みの経験とは、何か確固たるものとして存在しているわけではない。それは、コンタクト・ゾーンにおいてのみ把握可能な、その場の現れでしかない。ゆえに、被調査者の身体的経験なる確固たるものを想定し、それに対して調査者の身体的経験を合致させるように研究をすすめていくことが、必ずしも被調査者の理解につながるわけではない。重要なのは、調査者と被調査者とのコンタクト・ゾーンにおいて何が立ち現れているのかを考えていくことである。

9 おわりに——コンタクト・ゾーン再考

本稿は、「プロレスって本当に痛いんですか？」という問いから始まり、レスラーにとっての痛みの経験に接近するために、実践的パフォーマンス研究に着目した。そして、実践的パフォーマンス研究に、コンタクト・ゾーンという視点を当てはめた。最後に、この試みに残る課題を指摘しておきたい。

まず、実践的パフォーマンス研究の分析視点をコンタクト・ゾーンという視点で補うことで、調査者と被調査者とのあいだで生じている現象をより明確に描き出すことができたと思われる。筆者とレスラーとの相互行為において、またその相互行為によって、互いの身体がどのように関係づけられるのか、という点を浮き彫りにすることができた。また、アスリートの痛みの経験を扱う研究に対して、彼／彼女たちの経験に接近する1つの方法を実践的パフォーマンス研究とコンタクト・ゾーンから提示することができたのではないだろうか。しかし、もちろん課題は残る。本稿において参照した合気道における実践的パフォーマンス研究は、プロレスと同様に2人1組で行う文字通りのコンタクト・パフォーマンスである。そのため、相互作用に着目するコンタクト・ゾーンという視点は非常に合致した。しかしこれは、1人で走るマラソン・ランナーの痛みや苦しみの経験とは文脈が異なるだろう。したがって、ランナーの痛みの経験に迫る際には、また異なったアプローチが必要になるかもしれない。

次に、考察で得られた知見を参考に、コンタクト・ゾーンという視点自体にも考察を加えたい。筆者は、まさに筆者とレスラーとが衝突しあう、そのコンタクト・ゾーンにおいて、痛みを介して結ばれるというレスラーの痛みの経験に触れることができた。コンタクト・ゾーンは、初めに指摘したように、非対称的な関係性、また相互作用による自己の構築を捉える際に有効な視点としてその力をみせてきた。プラット自身のトランスカルチュレーションという言葉の選択からも伺えるように [Pratt 1992:7], コンタクト・ゾーンにおいては、ある集団が能動的に他集団の資源を利用するという意味での「流用」が主題にされてきた感がある。コンタクト・ゾーンという視点をういた多数の論文にも見受けられるように、このコンタクト・ゾーンにおける「流用」という概念は広がりを見せ、多義的に応用されている。

しかし、このような流れの中で、本来のコンタクト・ゾーンが持つ意味、それはつまり2つの異なる集団の衝突という側面が、ある意味で影を潜め、軽率に扱われるようになってきてしまっているのではないか。それは、接触・衝突後に、どのように相互の関係において他者と交渉していくのか、また他者の資源を流用していくのかという視点ではなく、接触や衝突自体が何かを生成させるという視点である。つまり、コンタクト・ゾーンにおいて生じる葛藤、交渉、流用という、意識的な次元における現象だけでなく、そのコンタクト・ゾーンを2つの異なる集団間に生じさせた接触自体、衝突自体が否応なくそこに立ち現れてしまう何かに注目すること。衝突によって結ばれる身体の位相なども含め、コンタクト・ゾーンという視点を考えていく必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 実践的パフォーマンス研究という名称は、森山が使用するものである[森山 2009:65]。
- 2) 女子中高生を中心にファンクラブの会員は1万人を超え、1977年にはフジテレビが夜7時というゴールデンタイムに女子プロレスの中継を開始した。この当時の女子プロレスラーの多くは歌手デビューしており、リング上で歌を歌うパフォーマンスも行っていた。
- 3) 通常、1つの興行において5試合から6試合が組まれる。1対1の試合でも、最低10人から12人が必要になるため、団体Aの所属レスラーだけでは全試合を行うことはできない。ゆえに、他団体に所属しているレスラーや、団体に所属しないフリーのレスラーを呼ぶ。
- 4) 年齢構成は、21歳以上25歳以下が1人、26歳以上30歳以下が2人、31歳以上35歳以下が1人、41歳以上が1人である。キャリアは、2年以上5年以下が1人、6年以上10年以下が3人、16年以上20年以下が1人である。活動レスラーの数は他の団体と比べて若干少ない。
- 5) ごく稀に、フリーの男子レスラーも団体Aの練習に加わることがあった。
- 6) 幸い筆者は、しばらく後に再び練習に参加することができた。そこで、徐々に上達していくのを褒められることで、そのような「嫌な痛み」は筆者の中から消えていくことになる。
- 7) 腕の間隔を広げて10回、少し狭めて8回、さらに狭めて腕立て伏せを6回、これを3セット。次に、体の背後に配置したイスに両手をつき、腕の力で自分の体を上に持ち上げる運動を20回、これを2セット。次に、同じようにイスに手をつき、体を深くまで落としてから上に持ち上げる運動を15回、これを2セット。次に、倒立した体勢を保持し続けるという腕の運動を1分間。最後に、不規則なタイミングで上げ下げする腕立て伏せを20回、これを2セット。

参考文献

- 合場敬子 2010 「女子プロレスラーの怪我と痛み」『スポーツとジェンダー研究』8:18-34。
- 亀井好恵 2000 『女子プロレス民俗誌——物語のはじまり』雄山閣出版。
- 田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。
- 福島真人 1993 「認知という実践——状況的学習への正統的で周辺的なコメント」ジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』（佐伯胖訳）産業図書, pp. 123-175。
- 森山達矢 2008 「技の感覚を伝達する実践の記述——言葉・身体感覚・精神性」『スポーツ社会学研究』16:87-99。
- 2009 「身体感覚研究の可能性——スポーツ社会学における研究を踏まえて」『スポーツ社会学研究』17(2):65-75。
- レイヴ, ジーン & エティエンヌ・ウェンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』（佐伯胖訳）産業図書。

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge.

Young, Kevin, Philip White & William McTeer 1994 Body Talk: Male Athletes Reflect on Sport, Injury, and Pain. *Sociology of Sport Journal* 11(2):175-194.